獨 協 祭　参加報告

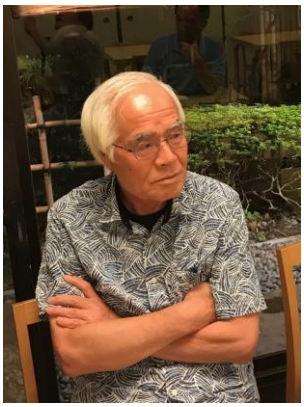
昭和 49 年卒　沖山秀司

獨協祭は 9 月 22 日(土),23 日(日)に開催されました。今年は「OB 教諭の紹介」を新たに企画し、石井先生、柏葉先生、上林先生、冨岡先生、山田先生、吉田先生、をご紹介しました。また、「第三回趣味の逸品展」では 2 作品を展示しました。
OB 会活動報告ではドクターズクラブ、歯科医師獨協会、サッカー部 OB 会、そして 2020 年に創部 50 周年を迎える鉄道研究部の展示がありました。今回の「獨協ぶらり旅」は新富町で創業 145 年を迎える割烹料理「躍金楼」（てっきんろう）をご紹介しました。

【 ＯＢ教諭 の 紹介】（ｱｲｳｴｵ順）

国 語　石井 征次 先生（1966～1980）

インタビューアー：昭和 46 年卒 坂下 信一郎



1972 年 7 月 北海道修学旅行にて
山田先生と石井先生

在職期間

獨協中学高等学校	S41 年 4 月～S55 年 3 月
埼玉獨協中学高等学校	S55 年 4 月～H19 年 3 月
〃　校長	H12 年 4 月～H19 年 3 月

＜インタビューアーとのエピソード＞
先生が着任された昭和４２年に現代国語の授業を受け持っていただきました。 更に高校２年次と３年次では主管を務めていただきました。
高校卒業後も先生を慕う同級生が多く年に一度は必ずクラス会を開いてきました。私が同窓会の幹事を務めておりますので先生とは毎年顔を合わせていました。現在私は税理士をしておりますが、獨協大学卒業後に税理士資格を取得するまで数年を要しました。その間、常に私の税理士試験の事を気にかけていただき、先生からたくさんのお言葉もいただきました。その結果、 何とか税理士資格を取得できるようになりました。感謝しております。
先生には 50 年以上面倒を見ていただいております。これからも先生の背中を追い続けます。

今回の取材に際して、昭和 46 年卒の皆さま

＜近況＞
埼玉獨協中学高等学校を退職された後は、石井先生の弟さんが設立した会社の会長を務めていました。
弟さんが亡くなってしまい、現在はその会社の社長に就任し、次期社長を育成しているそうです。

社長として仕事が出来て、尚且つ社長としての品格を持った人間を育てるのは難しい、とおっしゃっていました。社長業を熟す傍ら、週末は社交ダンスに勤しんでいるそうです。社交ダンスは頭も身体も活性化してくれるので、先生には非常に良い効果をもたらしているとのことです。誰よりも早くステップを習得してはいるが、格好をつけることが難しい、とおっしゃりながらも『女性には評判は良いんだよ』と少し小さな声ではありましたが付け加えていらっしゃいました。

インタビューアーと

社　会　柏葉　洋　先生（1967～2005）

インタビューアー：昭和 47 卒 佐藤 眞人

＜獨協との出会い＞

戦後、ドイツ語から英語への転換期に、不遇の時代に入ってしまった独協中学・高等学校の再建のために獅子奮迅活躍された　天野先生に教師としての姿に、感じるところが大であったことがきっかけ。
もちろん歴史と伝統にも惹かれて。

＜来てみたら廃墟寸前のようなボロ校舎で＞

教師仲間うちでは「木きんコンクリート」と言っていたが、見た目はモダンだったが、生徒が叩いたりして壁穴からは板が出ていた校舎が思い出深い。
在職中は、ドイツ文学を日本に折衷する学校、日本の国造りの教育の柱としての独協学園の歴史と伝統を教職員で汗と努力で守り、また発展させてきた自負はある。

＜近況＞

「高齢者ボランティア」
高齢者の方などが生き生きとした生活が送れるよ政府への働きかけ活動。
「江戸・東京の名所史跡巡り」
年に４回ほど、昭和以前のレトロな感じのするところを中心に名所巡り。

＜メッセージ＞

本は知識の宝庫と云える。良書に巡り合っての感動は忘れられない。新しい発見があり未知の情報にも近付け、著者の体験や想いをも追体験することが出来る。人間の成長にとって欠くことのできない知的活動と云えます。学生諸君も多くの良書との出会いによって人間性豊かな学生生活・人生を送られることを期待します。

9 月 22 日ご来校くださいました

2018 年 6 月 16 日 同窓会懇親会にて

音　楽　上林　英雄　先生（1955～1995）

インタビューアー：昭和 47 卒 佐藤 眞人

＜獨協との出会い＞

大学卒業時に、恩師に独協を紹介されたのが始まり。天野先生との面接を受けるため、目白駅から椿山荘の前と聞いて向かったが、バス停で椿山荘前というのがなくて、見つけられずに江戸川橋まで出てしまって、これはおかしいと思い、戻って行く途中に「つばきやまそう（椿山荘）」の前の独協の校舎にたどり着く。

＜思い出＞

獨協に勤めて 4～5 年のときに、天野先生にお仲人をお願いしたところ、快く引き受けていただいことが嬉しい思い出であるが、合わせて自身が熱血漢のあまり天野先生から「やりすぎだから」と退職勧告を頂いたことも数度・・・
主幹は三回務めました。

2018 年 6 月 16 日 同窓会懇親会にて

行きつけの 焼き鳥屋さん 昭和 44 年卒 花島氏と

音楽の時間では、ドイツ語の唄を愛唱歌（何も見ずに歌えること）として、いつかきっと社会に出て役に立つことがあると思いとりいれました。少し痛かったかもしれないが。

＜近況＞

楽しみは近くのコメダ珈琲店でコーヒーを楽しみ、食べてはいけない甘いものを正々堂々と少しずつ食することの毎日です。

＜メッセージ＞

獨協で学んだことがいつまでも誇りであってほしいと思います。

会 場 風 景

会 場 風 景

英　語　冨岡　卓　先生（1968～2007）

インタビューアー：昭和 53 年卒 西原 由恭

2018 年 6 月 16 日 同窓会懇親会にて

＜ご略歴＞

東京電機大学工学部を卒業後 、言語(英語)に興味を深め獨協大学英語学科並びに国際基督教大学大学院で言語学(英語教育法)を学ぶ。

＜職歴＞

本校には 1968 年～2007 年(定年退職)まで 39 年間（2 年間非常勤）在職。

獨協埼玉高等学校並びに東京電機大学の非常勤講師を務める。

〈高校時代〉

岐阜市郊外の米空軍基地宿舎を会場に 10 日間開催された JRC(青少年赤十字)国際リーダーシップトレーニングの東京代表として参加した。

<大学時代>

Ecumenical Work Campに参加し米国、韓国、香港、日本の大学生総勢26名で南多摩にある『島田療育園』(重症身障者のための施設)の裏山に安全な散歩道(幅約2m、長さ約900m)と休憩所をつくった。 朝日新聞(1963・7・29)に詳しく紹介された。

＜近況＞

75歳を機に昨年３月で教職を辞し現在は趣味のオーディオで原音再生を極めながら毎日一定時間をOCWを通じて言語学の研究に当てている。折をみて昔の教え子たちと会食をして若いエネルギーを得るのを楽しみとしている。

＜趣味＞

オーディオ、音楽鑑賞、野球観戦(幼い頃からの熱烈な巨人フアン)、Macパソコンフアン。

9月22日ご来校くださいました。

国　語　山田 直巳 先生（1970～1980）

インタビューアー：昭和49年卒 沖山 秀司

＜ご略歴＞

1948年（昭和23年）群馬県に生まれる。

1970年（昭和45年）國學院大學文学部卒業。

1978年（昭和53年）國學院大學大学院文学研究科博士課程単位取得 退学。

2002年（平成14年）文学博士。

2018年6月16日 同窓会懇親会にて

＜獨協へ就職するきっかけ＞

元独協学園の教務主任を務めた、大久間喜一郎氏（明治大学教授）の推薦を受け、就職。

就職の年、三月の初旬、大学の指導教授高崎正秀先生の推薦状を持って、面接を受けるために独協学園を初めて訪問。その時の印象は、円形のアールのついた校舎の佇まいに好感と興味をいだいた。隣がカテドラル教会、向かいが椿山荘であったことも好印象の理由だった。JR目白駅からバスに乗って、日本女子大前を通り、椿山荘入り口というバス停で降車。すぐに独協の校舎を見つけた。かなり古びた感じだったが、アールのついた建物の雰囲気が学園（欧米のアカデミー）を連想させ、ここに勤めてみたいと思った。

面接は緊張する雰囲気ではなかったが、篠原先生（後の校長）が穏やかな上にとても私に好感をもってくださり、いろいろ重要なアドバイスを頂いた。ソフトな印象の先生であったが、後に倫理学（哲学）を専攻されたと伺い、まさにそれを髣髴させる応対で、ますます独協が好きになった。実は私は、別の高校にも大学の就職課の推薦をうけていて、そちらも捨てがたいと考え、いわば迷っていた。しかし、篠原先生の面接で、学問研究を続ける事が重要で、教職についたからといって、学問を放棄するような態度は芳しくない。

大学院に進んで、勉強するということは大変に良いと奨められた。この言葉に百人力の支持を得たような気持ちになり、この学校に勤務し、独協生と共に自分も成長したいと強く思ったのである。

面接の終わり際、「あなたの前任の方も、その前の方も研究・教育に精進され、現在は立派な研究者として自立しています」、とのお言葉は決定的であった。

＜思い出＞

独協学園は、元文部大臣天野貞祐先生が学園長を務める学校で、獨協大学がその指導のもと、埼玉県草加市に創立された。その大学の目玉は、外国語学部で、私の親しかった高校の同級生がさかんに興味を示し、様々な情報を提供してくれた。彼は他の科目はともかく、英語はダントツに良くでき、もちろん合格した。その個性ある大学が創立されたのは、私の高校卒業の年だった。このことを印象深く思い出したのは、1970年４月から独協高校に勤務することになったからである。親しかった友人が四年前に進学した大学の系列高校に勤務することになるとは、まったく想像しないことで、イメージもなかった。

私は日本文学の民俗学的研究を志し、その達成に向けて、日本の祭りや芸能、儀礼、神話、昔話、日本人の行動様式など文化全般を学び、それとの比較を通した日本文学研究（特に記紀、万葉、源氏など）を行おうとしていた。というわけで、外国語学部には縁がなかった。

さて、1970年～1980年、独協高等学校に勤務。実は、独協が男子校であったことが私にはとてもよかった。女子高校にも非常勤講師として勤務した経験が何度かあったが、自分にはまったく向かなかった。
生徒と一緒になって、クラブ活動に、クラスの運営に参加し、遊びまわったりするには、性格的にも私にとって男子校がぴったりで、十年間とても充実していた。22歳の新米教師に、18歳の高校三年生ということになれば、4歳違いの兄弟のようなもので、ある生徒などは、話をしているうちに「兄ちゃん」などと呼びかけることがあり、林間学校や合宿などで、現場を移動していると先生というより、兄弟というのが、実感であったのだと思う。そのような場面に出くわすたびに、私はそれをとても楽しく、嬉しく感じた。

1974年夏、OBが同行した最初の合宿（岩手県 繋温泉）

＝1970 に創部された「鉄道研究部」初代顧問＝

ところで私は、初代鉄道研究部の顧問であった。鉄道に関しては全く知識不足で、生徒のほうが遥かに詳しく、何時も教わっていた。そして、「へー、そうなんだ」と感心するばかりの顧問で、その点では全く役に立たなかった。では何故と問われるだろう。
そもそもの出発は、1970年就職した年の文化祭に中学３年の生徒たちが、展示に有志参加した。その準備をする生徒たちのもとに夜遅くまで通って、宿泊してはいけないのに、それを助長したようなことがあった。それは当然良くない（ルール違反）のであるが、彼らはこの私の態度をみて、これは顧問には「鴨ダ!!」と判断したのではないか。で、鉄道同好会発足と同時に顧問。そして、文化祭の賞を何度か受けて、鉄道研究部に昇格。その後も、研究部というからには、社会との接点、社会と交通機関、社会的意義などをターゲットにすべきことを主張し、それの構造的、計量的研究の側面が必要だと言い続けた。私のこの態度がどうなのか、自分からはその評価はわからないが、一つの基調にはなったようだ。

1981年頃、OBに誘われて静岡旅行（大井川鉄道）

さて、私はバイクや車が好きだったので、モーターファンなどという雑誌をしきりに愛読していた。
で、マシンの一部、あるいは特徴、機能、デザイン等の僅かな要素でも車種が特定できるほどに詳しかった。生徒たちも興味を持っていたので、授業時間に新型バイクや車が売り出されたとか、そのメーカーがどうであるとか、どういうメーカーがこれから自動車産業として成長していくか、あるいは時にロータリーエンジンとレシプロエンジンの違い、総合性能としての優劣、プラットホームの構造の問題（堅牢性とは）、あるいはエンジンのバルブ、潤滑方式、ベアリングの耐久力、技術社会学的なテーマなどを喋った。当時イギリスのコルチナ・ロータスなどというスポーツカーの事が話題になり、そのカムシャフトを覆うカバーを外すと実に整然としたDOHCのカムシャフトとバルブが見え、メカの究極は美学、芸術に通じるなどと喋ったのだった。国語の授業時間にである。よいわけはなかったが、今彼らはどう思い出してくれるであろうか。

＜近況＞
現在、成城大学社会イノベーション学部心理社会学科教授。日本社会文化論を担当している。
日本社会の文化的構造、美意識、価値観などがどのようにして生成してきているか、などを考えている。
民俗や神話、儀礼、昔話、文学等に象徴的に現れている社会文化的要素を考える著書を執筆。従来の日本をフィールドとする民俗学的研究の上に、中国雲南省をフィールドとする死者儀礼の調査を続ける。市民講座や公開講座などもボランティアとして積極的に出講している。

2018年9月14日 インタビュアーと
独協時代から通う目白「五城目」秋田料理屋にて

保健体育　吉田　卓司　先生（1961～1973）

インタビュアー：昭和51年卒 谷田貝 茂雄

＜ご略歴＞
1936 昭和11年8月18日生れ（横浜市出身　82歳）
1955 昭和30年 3月　都立三田高校卒業
　　4月　東京教育大学体育学部体育科入学、ラグビー部に所属
1961 昭和36年4月　獨協中学・高等学校　入職
1968 昭和43年　日本体育協会公認一級スポーツトレーナー取得
1973 昭和48年4月　獨協医科大学講師（体育学）
1977 昭和52年 4月　獨協医科大学助教授
1979 平成 9年 4月　獨協医科大学教授
2007 平成19年 4月　獨協医科大学名誉教授

1969年狭山湖畔マラソンにて

【2018年8月23日(木)吉田卓司先生の御自宅にて】

谷田貝：今日は獨協中学・高等学校の獨協祭、獨協通信、ホームページに吉田卓先生を紹介したいと思いインタビューさせていただきます。まず、吉田先生は、どのようないきさつで獨協中学・高等学校の教員になったのですか？

吉田先生：私は、昭和30年東京教育大学（現在の筑波大学）体育学部体育学科に入学しました。学生時代は学友会ラグビー部に入部して活躍しました。Rugby foot ball は「楽苦備」ともいわれて楽しみと苦しみを備えているスポーツで4年間猛練習に励みました。多くのラガーマンの仲間と知り合い、協調性と規則を遵守する心、フェアーな精神を学びました。

谷田貝：私は獨協中学・高等学校から獨協医科大学入学後ラグビー部に入部して、その後獨協医科大学に赴任した吉田先生にラグビー部で直接の御指導をいただきました。懐かしい思い出です。

吉田先生：そうだね。懐かしいね。大学３年時には、研究室に入ることになっていて、公衆衛生学研究室で学びました。卒業後は、２年間スポーツウエアの会社に入職して営業マンとして勤務しましたが将来のことを考えて離職しました。当時、研究室の教授が旧制獨協中学の卒業生でした。その教授は日本医科大学を卒業した北浜 章先生といいます。北浜 章先生と、研究室の１年先輩の横山武人先生の推薦により、天野貞祐先生と面接して採用されたのです。初年度は講師として、翌年４月（1962 年昭和 37 年）から教諭に昇格して中学一年生の担任を任されました。小学校を卒業したばかりの新一年生は可愛くて、希望に満ちあふれ、元気で新鮮な子供達だったと記憶しています。

谷田貝：当時の獨協中学・高等学校の生徒達はどんな雰囲気でしたか？

吉田先生：中学に入学してきた生徒の家庭は裕福で教育熱心でした。伝統ある獨協を祖父や父親が卒業した師弟が多かったですね。天野貞祐先生を尊敬し道徳教育や豊かな心を持つ上品な生徒の育成を教育方針へ傾倒し入学した生徒が多かったですね。中学生は真面目で素直な生徒が多くみな成績も優秀でした。獨協中学からの生徒は成績が上位と下位に「二極化」していたね。その点高校からの生徒は真ん中くらいで平均していたね。

谷田貝：私は高校からなのですが、そういえば現在獨協中学・高等学校を卒業した獨協医科大学教授の多くは旧獨（獨協中学から）であることに裏打ちさせているのかもですね（笑）

吉田先生：そうかもね（笑）。当時の獨協高校の生徒は、外出して喫茶店に入りタバコを吸うヤツがいて生徒指導部の先生によく補導されていたね。

谷田貝：私の時代もそうでした。

吉田先生：全般的に「獨協生」は、上品で人柄良く、親しみやすく、愛すべき生徒が多く好感が持てました。

谷田貝：なにか思い出はありますか？

吉田先生：教育は「3 回怒って 1 回ほめる」。教育とは生徒の良いところを引き出すこと、生徒の能力を導き出すこと、teacher でなく educator になれを信条としていました。ある時、中学校で成績下位の生徒が、HR で英語の成績がよかったのでほめたら、家に帰って母親に「吉田先生からほめられた」と自信をつけて高校３年の英語実力テストでは１番になり獨協大学外国語学部に入学した。その後、銀行員となり NEW YORK 支店に勤務したのが印象に残っています。

谷田貝：まさに現在の教育ですね。叩いて育てるのではなく、いい部分を伸ばすと全てが良い方向に伸びていくのですね。他には？

吉田先生：天野先生は、卒業式の式辞で「学校の優等生は限られているけれど、諸君は可能性そのもので、みんな社会の優等生になれる」と述べたことです。天野先生の訓話が卒業生の頭の片隅にあり、それで大成する卒業生が多くいることを誇りに思っています。

谷田貝：本当にそうですね。私も、天野先生の「学校の優等生よりも、社会の優等生であれ」という言葉が忘れられません。吉田先生は、その後どうされたのですか？

吉田先生：当時の小池辰雄先生が、「獨協医科大学をつくるのに、許可が必要なので君の名前をかしてくれないか？」というので、「いいですよ」と答えました。そんなこんなするうちに、「高校の教師は教育者。大学の教員は研究者」と誰かから聞いて獨協医科大学の設立と同時に、勝瀬武先生と一緒に獨協医科大学に赴任しました。

谷田貝：そこで獨協中学高等学校から入学した私と出会うわけですね。獨協医科大学に赴任当時、吉田先生は「下宿屋さん」をやっていましたね？

吉田先生：そうなんだよ。当時の獨協医科大学周辺は、夜食べる場所がなかった、コンビニもなかった、そして獨協高校から獨協医科大学に入学してきた学生をあずかったんだよ。君も知っている、大出弘孝、船田一郎、沼部聖、池田聖、前田栄祐、鈴木義信などなど

2018 年 8 月 23 日 ご自宅にて　インタビューアーと

谷田貝：おどろきです！みんな個性強い獨協生ばっかりですね。

吉田先生：そうなんだよね。いま考えると（笑）。その後平成３年に心臓病になるわけなんだよ。

谷田貝：忘れられませんね。3 月の土曜日に吉田先生が私の内科外来にきて「テニスの 2 ゲーム目になると胸が苦しくなって休んでいるとなおる」ということで検査をすすめました。吉田先生は血液検査では正常で、心臓の検査結果も強く狭心症を疑うものではありませんでした。しかし「症状から狭心症が疑わしい」のでカテーテル検査にすすめ 99%と 75%の狭窄でバイパス手術となりましたね。その後、正常の範囲内で赤血球が下がったので私が強く「吉田先生がん検診してないんだから胃カメラくらいやってください」ということで、先生しぶしぶ胃カメラやったら立派な胃がんがみつかりそれも無事に手術を受けてなおしましたね。本当に運がよかったです。

吉田先生：あの時のことは本当に感謝しているよ。それから私は埼玉に引っ越して、研修医の時に君が指導した岡茂樹先生に大腸がんをみつけてもらったんだよ。それも偶然で。その後、また狭心症になって君の医局の後輩で獨協医科大学埼玉医療センター循環器内科田口功教授にカテーテル治療してもらっただ。獨協の卒業生達は命の恩人だよ。本当に感謝している。

谷田貝：それはひとえに吉田先生の「お人柄」ですね。

吉田先生：これからもよろしく頼むよ。さてボーリングに行ってこようかな。

この後、吉田先生は自家用車でボーリングに行きました。聞くところによると「アベレージ 200 前後」の腕前だそうです。いつまでも元気な吉田卓先生に心から御礼を申し上げて御自宅をあとにしました。

2018 年 6 月 16 日 同窓会懇親会にて、渡辺校長と

【 第三回 趣味の逸品展 】

昭和 39 年卒　二木 昇平さん

東京慈恵会医科大学卒業時に作成したﾛｰﾙｽﾛｲｽ

1972 年 慈恵大を卒業し、大学院に行く 3 月頃、試験勉強で忙しかったが終わったとたん、暇で時間をもてあましていました。たまたま近くの模型店で購入しました。試験勉強の集中力が持続し、1 日 16 時間かけたころ、2 週間で完成しました。これがきっかけで、その後も模型つくりが趣味となりました。

昭和 39 年卒　渡邊 光幸さん

水彩画　2 点

同級生の柳原さんと

私は毎年、年賀状に桜風景を絵にしています。毎年、桜を求めて旅に出ます。しかし、日程の関係で開花が早かったり終わっているとガッカリです。昔は、現場で軽くスケッチして、写真を撮って、年賀状は一枚づつ描いていましたが、今は枚数も多くなったため、賀状は写真屋に作成してもらっています。桜の絵は、山形県酒田市の日和山公園です。機関車の絵は、東武動物公園の列車です。埼玉県薬剤師会の会報の表紙になりました。獨協の先輩、小泉さんに頼まれて毎月、埼玉県を題材にして 2 年間描きました。

【 図 書 寄 贈 】

昭和 20 年（5 年制）卒 黒沼 昭夫さん

同級生の「回顧録」とご活躍された中外製薬社友会報を同窓会蔵書として、寄贈頂きました。

【 ０ Ｂ会 活動報告 】

【　獨 協 ぶらり旅 】（卒業生のお店）

今回は 1 件、中央区新富町で創業 145 年の老舗割烹「躍 金 楼」（てっきんろう）さんをご紹介します。

レポーター：昭和 53 年卒 谷口 有三

西に銀座、北に八丁堀、南に築地が位置する中央区新富。場所柄、裏通りでもビル群の中に残された柳の木と風情ある木造家屋の料亭。創業は明治 6 年、この地で 145 年、母校より歴史がある。

昭和 24 年に建てられた現在の店舗は今年、有形文化財登録された。お店は個室と カウンター席で入口が分けられている。

カウンター越しに天ぷらを揚げる 5 代目店主 澗岡寛晃（たにおか　ひろあき）さんをインタビューした。平成 2 年卒業 で中高大学と純粋獨協生である。

老舗の跡取りがなぜ獨協に入ることになったか女将さんを務めるお母様に伺うと、獨協生は何しろ人柄がいい！ 先輩後輩の関係性が良いとのことだ。本人も、今もなお続く獨協での繋がりを嬉しそうに語っていた。蛯名校長、主管は米澤先生。また、冨岡先生、音海先生、音在先生が忘れえぬ先生となっているとのこと。取材陣一同お料理を頂きながらカウンター越しのインタビューであったが、手を休めることなく控え目な口調で日本酒の愉しみ方や、江戸、明治のこの街の文化までエスプリを交えてのお話が飛び出す。

やはり、伝統と客層から高いレベルのトーク力が求められるのだろう。獨協大経済学部卒業後、京都西陣で修行を積み東京有明の加賀屋で接客に揚げたての天ぷらは旨いに決まっているがサクサク感、そして飲み干したいおつゆにすっかり虜になってしまった。

2018 年 5 月 29 日

2018年5月24日（金曜日）

伝統と挑戦 受け継ぐ「粋」

料亭 躍金楼

一期 一絵

「躍 金 楼」は 2018 年 8 月 24 日 読売新聞で紹介されました。

〒104-0041　東京都中央区新富 1-10-4

電話 03（3553）0365

営業時間 11:30～13:30　17:00～21:00

【 記念写真 撮影サービス 】

今回初めての試みとして、来場者の写真撮影を行いました。同窓会旗をバックに撮影し、インクジェットプリンターにて２Ｌサイズにプリントしてご提供させて頂きました。（撮影後、約５分間）

大好評で、22 日＝40 枚、23 日＝60 枚、をプリントしご提供しました。

【同窓会グッズ等の頒布】

次の通り頒布しました。

＜同窓会グッズ＞

ポロシャツ　　￥3,000（新製品）

ピンバッチ　　￥2,000

カフスボタン　￥3,000

今回作成したポロシャツは、M=15 枚 L=20 枚 XL=15 枚の計 50 枚。XL=4 枚を残して 46 枚をお買い求め頂きました。今後、追加生産いたしますので、ご希望の方は同窓会事務室までご注文ください。

＜野球部応援グッズ＞

昭和 54 年卒 野村芳樹さん（野球部 OB）が作成しました。同窓会展示室にて頒布し、夏の高校野球応援に駆け付ける保護者の皆様にも好評でした。

在庫がございますので、ご希望の方は同窓会事務室までお問い合わせください。

キャップ＝¥2,000（メッシュ仕立てフリーサイズ）

T シャツ＝¥1,500（L サイズのみ）

セットで＝¥3,000

今年もご来校された昭和 20 年（5 年制）卒の

神山さん・黒沼さん